

II. 特別講演

「脳卒中制圧の新展開」

広島大学大学院医歯薬学総合研究科
創生医科学専攻 病態探究医科学講座
脳神経内科学 教授

松本 昌泰

医学・医療の進歩は社会に還元されてこそ、その本来の意義を全うするものといえる。本邦に先立ち高齢化社会を達成してきた西欧先進国は、障害をもたらすQOLを大きく低下させ医療費を圧迫する最大要因ともいえる脳卒中に対して、本腰をいれてその発症予防、急性期ならびに慢性期の治療及び医療システムの再構築に最大限の力を注ぎつつある。

一方、西欧諸国に比し、より急速かつ未曾有の高齢化社会に突入しつつある我が国においては、脳卒中对策はより深刻であるにもかかわらず、これまで何らの十分な国家戦略が立てられてきていない。確かに、生活環境の改善や高血圧対策の充実などにより脳卒中による死亡は世界でも類例のない急速な低下を示したが、高齢者の増加により脳卒中の発症やその罹患率は逆に増加し続けており、既に最大の医療費を要する疾患となっている。今後の活力ある高齢化社会の構築のためにも、脳卒中の予防・治療対策の充実やその担い手の育成を含めた総合的な対脳卒中国家戦略の早急な立案実施とその医療経済学的評価が欠かせないものと思われる。

かつて脳卒中といえは、その大半は脳出血が占め、血腫除去術などの脳外科的治療の対象となる疾患とのイメージが強く、内科的治療については無力感が支配していた。しかしながら、降圧療法の進歩などにより、今日では脳卒中の大半は内科的治療の対象となる脳梗塞で占められるようにな

ってきている。また、その救命率も向上しており、的確な病態診断に基づく内科的治療により、その再発予防や脳血管性痴呆への移行を阻止することがきわめて重要な課題となってきた。さらに、血栓溶解療法に代表される新たな脳梗塞超急性期治療法の登場やMRI拡散強調画像法に代表されるが画像診断法の進歩により、脳梗塞急性期の診断もEBMに基づく治療へと大きく変貌しつつある。

本講演ではまずはじめに、脳卒中診療の変貌を象徴する言葉として用いられているbrain attack(脳発作)の意義について、その背景となる臨床研究(NINDSrtPAトライアル, ECASS, PROACTなど)を紹介するとともに、我が国における超急性期治療の現状をまとめて紹介する。つづいて、内科領域で扱う機会の多い脳梗塞の予防に関するEBMの推進に不可欠な、各種の臨床研究やそのメタ解析を、抗血栓療法(APT, ATTなど)、抗高脂血症療法(4S, CARE, LIPID, PROSPER, HPS, ASCOTなど)、糖尿病や高血圧のコントロールに関するトライアル(UKPDS, WHO-ISHメタ解析, PROGRESS, HOPE, LIFE, SCOPE, ACCESSなど)などについて最新の知見を紹介する。また、演者が主任研究者として推進しつつあるJ-STARS(Japan Statin Treatment Against Recurrent Stroke)研究の概要を紹介する。さらに、今後のポストゲノム時代において神経内科領域で益々重要度を増すと考えられるsubclinical diseaseへの対応については、脳ドックにより高頻度に見いだされる無症候性脳血管障害への対処法を実例として紹介しながら、専門領域の異なる医療関係者が協力して治療ガイドラインを作成することの意義や脳卒中協会などによる組織的な大衆啓発活動の重要性についても言及する予定である。